

音声会話とテキストチャットの次話者選択の検討

伝研究室 16L1077H 川島南斗

1. はじめに

人が円滑に会話を進めるための手段として Sacks ら(1974)が話者交替システムを提唱している。話者交替については様々な研究がされており、榎本・伝(2011)は次話者選択技法が用いられていない話者交替において、現話者の視線が向かっている聞き手が次話者として自己選択しやすい傾向を示唆した。また Schegloff (2007) は話者交替に関わる「隣接ペア」という定型の発話のペアを定義した。これは質問に対する返答のように、特定の性質を持った第一部分が発話されたなら対応する第二部分が発されることという相互行為上の期待をさせたり責務を感じさせたりするものである。また、高橋(2006)次話者選択に関わる言語的手段をピックアップしており、隣接ペアや連続質問による選択を会話連鎖依存としている。

これらはいずれも音声会話の研究であり、近年利用者が増加している「LINE」などのテキストチャットベースのコミュニケーションで同様の規則が用いられているかは明らかにされていない。そこで本研究では「隣接ペア」に着目して、テキストチャットと音声会話の他者選択のそれぞれの特徴について分析を行った。

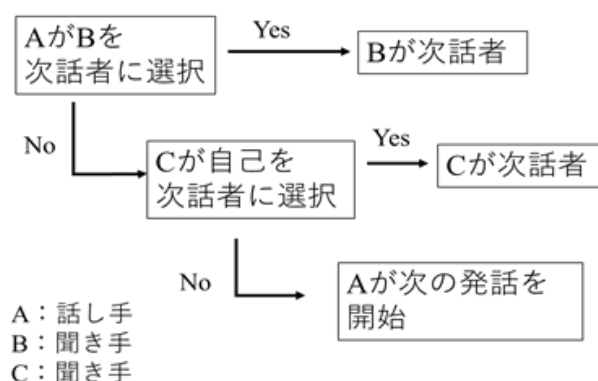


図1. 複数人の参加者がいる会話での次話者選択の例

2. 分析 1

2.1. 目的

テキストチャットを用いた多人数会話で生じる質問文に返答した話者とその質問文の直前に発言した話者を比較することによって、テキストチャットにおける話者交替の特徴を会話連鎖依存の観点から検討する。

2.2. 方法

データ: 「LINE」を用いた、10分間で3人で遊びに行く予定を立てるというテーマで行った会話を新規収録した。収録には参加者が各自日常生活で使用しているスマートフォンを用いた。参加者は20-24歳の大学生18名で女性9名、男性9名でありタイピング能力に顕著な差は見られなかった。親近性の高い同性3人を1組として6組分の収録を行った。収録の際、3人はそれぞれ別の部屋に配置してお互いの状態を確認することはできなかった。

手続き： ELAN を用いて発話内容を転記した。次に会話中に生じた隣接ペアをラベリングした。質問は相手を特定しているものとそうでないものに分類した。はじめに質問の直前の発話者と返答者が一致する割合を求めた。次に複数の返答があった質問文に対しては最初の返答者と直前の発話者のみを対象として一致する割合を求めた。最後に会話中に見られた提案—受諾／拒否，評価—同意／不同意の隣接ペアも対象に含めて、第一部分の直前の発話者と第二部分の発話者が一致する割合を求めた。また帰無仮説を一致率は 50% であるとする一標本 t 検定をそれぞれ行った。

id	話者	隣接ペア	参照先	発話内容
43	C			オリンピックじゃん
44	A			儲かりそうww
45	A	質問		ユニバってなにあんだっけ
46	C	返答	45	スパイダーマン

図 2. 質問の直前の発話者と返答者が一致している例

2.3. 結果・考察

質問に対して複数の返答があった場合には、質問文に対する最初の返答者と直前の発話者のみを対象として一致率を調べ、一標本 t 検定を行ったところ、二者の間に関連がない場合の期待値との有意傾向が見られた ($p=0.05$)。さらに分析対象を質問—返答以外の隣接ペアにも拡大して分析を行った。このとき返答者を指定しない隣接ペアの第一部分の直前の発話者と第二部分の発話者の一致率を調べ、一標本 t 検定を行ったところ、二者の間に関連がない場合の期待値と有意な差は見られなかった ($p=0.402$)。

表 1. 質問に対する最初の返答者と直前の発話者の一致率

グループ	1	2	3	4	5	6
ペア数	8	7	7	2	3	5
一致率	0.750	0.857	0.857	1	0.333	0.600

表 2. 隣接ペアへの最初の応答者と直前の発話者の一致率

グループ	1	2	3	4	5	6
ペア数	12	9	7	4	9	15
一致率	0.583	0.555	0.714	1	0.500	0.400

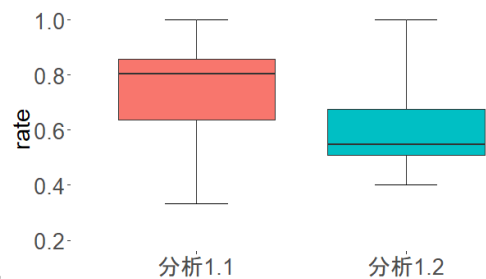


図 3. 分析 1.1 と分析 1.2 の比較

結果からテキストチャットでは他者選択手段を用いない質問文においては、直前の発話者と最初の返答者が一致するという傾向が見られ、テキストチャットで生じた質問文における他者選択に会話連鎖を用いている可能性が示唆された。しかし隣接ペアに分析対象を拡大すると有意差がなくなってしまうため、テキストチャットの全ての他者選択に対して会話連鎖が強く影響しているとは言えなかった。

3. 分析 2

3.1. 目的

分析 1 の結果と音声会話で生じる隣接ペアを用いた話者交替のデータの比較を行うことでテキストチャットの話者交替の特徴を検討する。そのためにテキストチャットにおける話者交替で他者選択に用いられる言語的手段と、音声会話における話者交替で他者選択に用いられる視線行動と言語的手段の使用のされ方の違いに着目して比較を行う。

3.2. 方法

データ： 音声会話のデータとして、『千葉大学 3 人会話コーパス』(Den & Enomoto, 2007) から「語り」段階の多い会話を除いた 9 会話 (話者 9 組 27 名, 各約 10 分) を分析に用いた。テキストチャットのデータは分析 1 と同じものを用いた。

手続き： 質問文をラベリングし、質問を行っている参加者の視線行動を聞き手に対して視線を向けていて聞き手の視線を得られている、聞き手に対して視線を向けているが聞き手の視線を得られていない、視線を誰にも向けていない場合の 3 パターンに分類した。次に質問者が用いた他者選択手段を視線使用、知識勾配、言及、問い返し、呼びかけの 5 つに分類した。また分析 1 で用いたデータにおいても、テキストチャットの性質上使用することのできない視線を除き、同様に他者選択手段を知識勾配、言及、問い返し、呼びかけの 4 つに分類した。

3.3. 結果・考察

テキストチャットと音声会話の視線を用いた質問と用いなかった質問で、それぞれ他者選択手段の使用割合を比較したところ、言語的な他者選択手段を用いた割合が最も少なかったのはテキストチャットの場合であり、最も多かったのは音声会話で視線を用いたときであった。また使用割合が高い言語的な他者選択手段はいずれも知識勾配であり、呼びかけは音声会話で視線を用いなかったときには見られなかった。

テキストチャットと音声会話の視線を用いた質問を比較すると、テキストチャットの方が他者選択手段を使用した割合が低く、相手を特定する質問が少ないことが分かった。またそれぞれの他者選択手段の使用割合を見ると、知識勾配や問い返しが多く言及や呼びかけは少ないと言った共通点が見られた。

テキストチャットと音声会話で視線を用いなかった質問を比較すると、視線を用いなかった場合の方がテキストチャットよりも他者選択手段の割合が高いが、知識勾配と問い返しの割合はほとんど同じであり、言及の割合だけが増えていることが分かった。

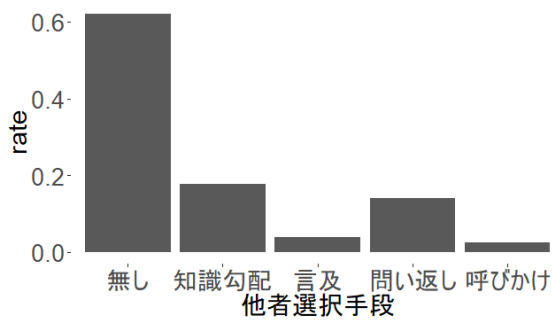


図 4. テキストチャットにおける質問で用いられた他者選択手段

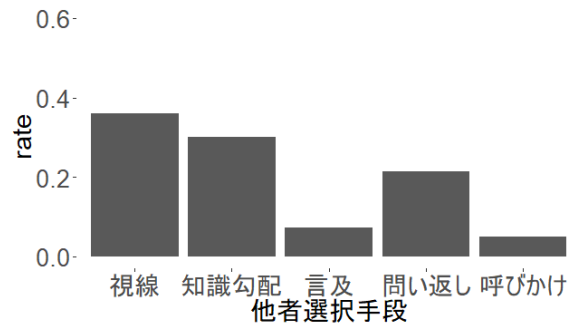
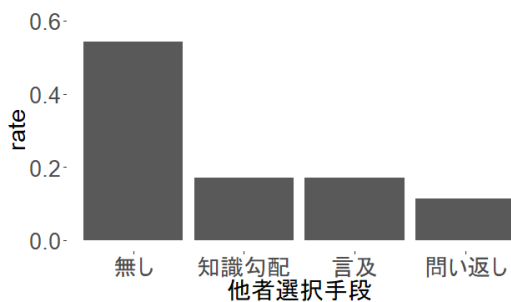


図 5. 音声会話における視線を聞き手に向けた質問で用いられた他者選択手段



← 図 6. 音声会話における視線を聞き手に向けない質問で用いられた他者選択手段

表 3. 言語的な他者選択手段の条件ごとの使用割合(%)

	無し	知識勾配	言及	問い返し	呼びかけ
テキストチャット	62.0	17.7	3.8	13.9	2.5
音声会話 視線有り	36.1	30.1	7.3	21.5	5.0
音声会話 視線無し	54.3	17.1	17.1	11.4	0

4. 総合考察

テキストチャットでの話者交替について隣接ペアと他者選択手段に着目して分析を行った。分析 1 では非言語情報の欠落から会話連鎖依存の働きによって隣接ペアの第一部分の直前の発話者と第二部分の発話者の一致率が高くなると考えたが、質問の直前の発話者と最初の返答者の間でしか有意傾向は見られなかった。分析 2 では音声会話との言語的な他者選択手段の利用の仕方を比較したところ、テキストチャットでは音声会話で視線を用いた場合と同じバランスのまま、全体的に他者選択手段の使用割合が少なくなっていた。これらのことから、テキストチャットでは、話者交替に音声会話と異なる法則を用いているというよりは、話者交替規則自体が希薄になっていることが考えられる。本研究ではテキストチャットと音声会話の比較を行ったが、今後はテキストチャットと音声会話の間であると考えられるビデオチャットも分析対象に含めた検討を行っていく必要があるだろう。